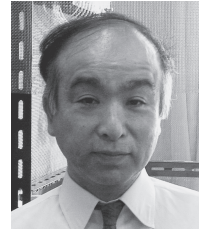


鍋倉 淳一

自然科学研究機構生理学研究所
 発達生理学研究室生体恒常機能発達機構部門



平成15年11月に岡崎国立共同研究機構（平成16年4月から大学共同利用機関法人自然科学研究機構に改変）生理学研究所の新設部門に着任しました。医学部卒業後、産婦人科研修医として超音波診断装置を使って胎児行動を観察していると、発達に従い行動やリズムが変わっていくこと、またホルモン調節に関して脳内機序が殆ど解明されていないことに驚き、その基盤である神経生理を覗いてみたいと、当時九州大学医学部大村裕教授のもとに大学院生として門戸を叩きました。最初は臨床医療と基礎研究の違いに戸惑いながら実験を続けていくうちに基礎研究の面白さに取り付かれ、米国セントルイスのワシントン大学 Lichtman 博士のもとに神経回路の発達（synapse elimination）の研究のため留学しました。論文ひとつを書くのに5年以上かかり、ポストドックにはきついlabでしたが、徹底したディスカッションと完成度の高い論文を仕上げることに感心させられました。臨床医学に戻るか悩んだ時期に「脳と発達」（朝倉書店）を読んで基礎研究を続けることに決め、当時東北大学の赤池紀生教授のもとに助手として帰国し、細胞急性単離法やパッチクランプを学びました。その後、秋田大学、九州大学と研究の場が変わるたびに、新しい環境による刺激を受け、また研究一遊びの仲間の輪が広がり大変有意義でした。近年は、初心に志していた神経回路の発達、特に発達後期における神経回路機能の再編成をメインテーマに、神経回路や受容体—イオンチャネルの発達期における可塑的变化、神

経活動による調節や関連する制御因子の解明の研究を電気生理学的手法を中心に行っています。特に、未熟期において興奮性であるGABA・グリシン作動系が発達とともに抑制性としての機能を獲得する機構と制御因子についても研究を行っています。また、synapse eliminationや受容体変化に加えて、近年伝達物質自体が発達スイッチするという神経回路発達の新しいメカニズムを捉え、その制御機構について調べています。近年、再生は発達を繰り返すという仮説のもと各種障害後の回復期に各種未熟期機能が再出現する機序も注目し、研究に明け暮れています。現在多くの分子が発見されるなか、未だ関連する機能が明確でないものも多く存在します。そのためにも「生理学とは新しい生命現象を見つけること」と位置づけて、多角的アプローチを用いて生理機能解明に向けた研究に取り組んでいこうと思います。

略歴

昭和56年	九州大学医学部卒業
昭和62年	九州大学大学院医学研究科卒業
昭和62年	米国ワシントン大学 研究員
平成3年	東北大学医学部 助手
平成5年	秋田大学医学部(第一生理学)助教授
平成7年	九州大学医学部(第二生理学)助教授
平成15年	岡崎国立共同研究機構生理学研究所 発達生理系恒常生理機能発達分野 教授